

ウエルビーイングの実現

— 日本型教育の役割 —

谷本 寛文

高橋・京都光華女子大学副学長で京都大学特任教授の谷本寛文先生から、「ウエルビーイングの実現—日本型教育の役割—」と題して三十分の問題提起をいただきます。よろしくお願ひします。

谷本…皆さん、こんにちは。

京都光華女子大学副学長の谷本でございます。本日、発表させていただく中身ですけれども、私の課題意識としては、大きく二点ございます。

一つ目は「ウエルビーイングの実現のために何が必要なのか」ということです。先ほど、高橋先生からウエルビーイングというものをどのように捉えるか、という枠組みについての重要なお話がありました。ウエルビーイングとは具体的にどのよ

うなものなのか、ということを経験から明確にすることは非常に重要なことであると考えます。

二つ目は、「どうすれば実現することができるのか」ということです。ウエルビーイングの実現のために具体的にはどうしたら良いのか、そのことをいかに自分ごととして考え行動することができるとか、ということを経験から明らかにする必要があると考えています。

日本型の教育、あるいは日本型のウエルビーイングという価値を明らかにするため、現在、海外から日本的なウエルビーイングはどのように映っているのか、ということを経験から明らかにしようとして、学教育学部との連携による協同研究から明らかにしようとしています。

また、昨年度、米国ハワイの実践現場に行きまして、ウエル

ビーイングな社会をいかに実現していくかということについて調査研究をしていますので、米国から見た日本の教育という視点からも話を進めていきたいと考えています。

さらに、問いを見い出すことの重要性についても述べたいと考えます。「日本的なウエルビーイングとは何であるか」ということを問うことは、まさに「日本がこれまで大切にしてきたものは何なのか」また、「これからも大切にしていくなすべきことが何なのか」ということを明らかにすることにつながると考えています。

私が、日頃から意識していることは、「見えにくいものを見えやすく。また、分かりにくいことを分かりやすく。」ということです。それは、問いを立てることで何となく分かっているような状態から、さらに深く探究し、そして深い認識にたどり着く。つまり抽象と具体の関係を明らかにするプロセスが重要であると考えています。抽象と具体の関係に着目しこたわることとで、「なるほど」という実感や、「腑に落ちる」という感覚が生まれ、それは、行動化につながるエネルギーになると考えています。では、スライドを送らせていただきます。

ここでは、「日本型教育の輸出」ということについて話をさせていただきます。奈良県に国際高等研究所 (International Institute for Advanced Studies) という研究所があります。そこで、「日本型教育の輸出」に関する研究をしてまいりました。

二〇一六年から日本の教育を求めている国が多数あります。民間企業、そして政府機関と協力しまして、日本型の教育を輸出していく、というそういった取組をこれまでしてまいりました。二〇一六年から始まり二〇二〇年、そして二〇二一年からはコロナ禍において、それを踏まえた上での新たな日本型教育の戦略的改善、発展ということで、調査研究事業を進めてまいりました。

このスライドに示していますのは、どういった国が、どのようなニーズをもっているのかということです。エジプトやインドなど、さまざまな国があります。各国が着目する日本型の教育というのはいろいろとありますけれども、要は、具体的に日本の教育の何が注目されたか、ということを次のスライドに示しております。学級会、係活動、児童生徒の当番制による掃除、運動会、委員会活動、日直の仕事、クラブ活動、さまざまあります。その中に、道徳も含まれています。合わせて教員による授業研究、レスンスターディーが着目されているということが分かります。

海外と関わっていますと、日本特有の教育活動を自国に取り入れれば、日本的な勤勉さであるとか、責任感であるとか、そういういったものが養われるというように捉えがちですが、実はそうではなく、日本特有の教育活動を通して、日本の教育が何を大切にしているのかということを見取っていただく必要がある

と考えています。

例えば、ここに挙げています活動を通して、どのような力を育成しようとしているかということですが、責任感、協力、主体性、粘り強さ、共感、思いやり、誠実、勤勉、感謝、向上心、いろいろあります。そういったものを日本の一つの良さとして、いろいろな国が着目しているという状況がございます。

このような調査研究を基に、さらに、新しい取組を発展的に展開しています。現代社会は、どんな時代か、と問われたとき、端的に示すキーワードとして、VUCA時代という言葉がございます。いわゆる変化が激しく、そして予測困難な、また、これまでに経験したことのない問題を解決しなければならぬ。そういった時代に、どんな力が求められるのかということとです。私は、さまざまな国と日本の比較研究も自身の研究領域の中に位置付けていますけれども、非認知能力を自覚的に磨く必要があると考えています。さまざまな非認知能力がございます。その中でSEL (Social and Emotional Learning) の教育がいろいろな国で、今まさに展開されています。非認知能力というものは数値化しにくく、また、目に見えにくい能力です。

非認知能力というのは、主体性であるとか、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、創造性、コミュニケーション能力といった、数値化して示しにくい個人の特性による能力ということに

なります。

文部科学省は学力の三要素というものを示していますけれども、それに当てはめてみると、それでも非認知能力、そして認知能力の関係性が見えてきます。認知能力と非認知能力は、独立して存在するのではなく、共にスパイラルな関係で発展していくべきものです。

このスライドは、OECDが示しています Social and Emotional Learning の概念図となります。中央にSELとあり、外側に五つの重視する能力を挙げています。個人理解、感情の制御力、共感力、社会性、思考決定力というものです。この五つの能力以外にも、さまざまな非認知能力というものがあります。少し具体的に挙げますと、個人理解ということとは自分自身を理解する力ということになりますでしょうし、感情制御力とは、自分の感情をコントロールする力と言えます。

今、さまざまな子どもたちが、自分の心の中のどうしようもない、いら立ちとか不安とかそういったものを消化しきれない状況の中にいて、自分よりも弱い立場の人をつくるとか、あるいははじめというような形で解消しようとするような状況が見られます。自分ではどうしようもない、この複雑な思いをコントロールする方法がある、ということを知っているということとは非常に重要なことです。つまり、大切なことは何かということ、課題や問題を克服したり、目標を実現したりするための

すべ、これを知って理解するという自覚的認識が重要なのです。また、共感性、他者を理解する力であるとか、社会性、他者との関係を築く対人関係力、責任を持って思考決定する力というようなものが、非常に重視されているということです。

特に私が、学生と関わっていて重視したい力の一つに「グリット」という力があります。「グリット」とは、乗り越える力ということです。それは単に、我慢するとか自分を抑制するとか、そういうことではなく、課題や問題をいかに乗り越えていくかという、しなやかで、たくましく、粘り強い力です。

また「レジリエンス」という力です。修復能力と考えられますけれども、すぐに負けないとか、折れないとか、立ち直るとか、そういった力をどういうふうを意識化して、自分で修得していくかということが重要になると考えます。

最後に示しているのは、「エゴレジリエンス」という力です。学生は、日常生活においていろいろなストレスを抱えますが、社会に出たときには、その比にならないほどのストレスを抱えることが予想されるわけです。それを一つ一つ我慢して乗り越えなさいという発想ではなく、自分でそのストレスをうまくかわしながら、うまく解決していく、そういった方法が学生に理解されるならば、社会に出たときに創造的な働き方というものができるのではないかと考えています。

続いて、文部科学省からの委託事業を基に、海外から見た日

本の教育について伝えたいと思います。昨年度、二つの文科省の委託事業に申請し、採択されました。

一つ目は、教員研修の成果確認と評価モデルの確立に関することということで、ハーバード大学のCanvasというシステムを使ったBL型の研修に関わる成果になります。これは、国立大学七大学、そして教育委員会一つ、私学では京都光華女子大学が採択となりました。

二つ目は、教員研修や授業研究の高度化に関する委託事業です。海外では、日本の教員の研修に対する興味、関心が高い状況があります。この委託事業の採択は、国立大学三校、そして私立大学では京都光華女子大学のみが採択され、採択順位は二位ということでした。

ここでは、先ほど高橋先生からの提言にもありましたが、幼児教育と小学校教育をつなぐことの重要性について取り上げます。子どもたちの発達、成長は途切れることがありませんから、小学校の先生は小学校だけ、幼稚園の先生は幼稚園だけ、中学校は中学校だけという発想では、十分な教育はできません。系統的にどのような力を子どもたちに付けて、そしてウェルビーイングな社会を実現するために必要な資質・能力をいかに磨き、自立させていくのか。ウェルビーイングな社会の実現に向けた系統的でスパイラルな構造での教員研修プログラムのモデルを本プロジェクトは示したということになります。

具体的なものを少しご紹介させていただきます。昨年度、米国ハワイと欧州メルボルンへ行きました。スライド左側の写真はハワイにあるノエラニ小学校という小学校です。この小学校はSELの育成の時間を一週間のうち一時間、カリキュラムの中に設定しています。私が感じた印象的な教育活動としては、写真にあるように、絵本とか本を基にその場面に自分の身を置いて、「自分だったらどうするか」とか「普通、考えればこうするのに、なぜしないのか」「普通は、こうしないのに、なぜこうしたのだろう」まさに、道徳の時間に子どもたちがモラルジレンマの中で考えているようなことが実践されていました。授業を通して、自分の心の葛藤をダイレクトに表現をして意見をディスカッションすることで、前向きな方向性を見出しているという子どもたちの姿が見られました。これは、日本が道徳の中で大切にしていることとの共通性があると感じました。

共通性ということについて、私がお伝えしたい一つに異文化交流ということがございます。多くの学校現場において日本の文化と他国の文化の違いに着目して交流をしていく、ということがよくあります。違いに着目することは重要なことですが、それ以上に「共通点を見出す」という視点、考え方がとても重要であると考えています。

違いというのは見える形で認識しやすいのですが、逆に違いから共通性を見出そうとすると、表面的には見えにくい心に着

目する必要があると思います。国ごとに文化や伝統に違いがあるもの、大切にしていることは、実は共通することが多いということに気付くことができます。これが、国と国の枠組みを外した、いわゆる垣根のないグローバル社会の中でウェルビーイングを実現するための重要な視点であると考えています。

右側の写真はメルボルンでの様子ですけれども、ビクトリア州政府の教育省が非常に手厚く迎えてくれました。メルボルンでもSELの教育が非常に重視されています。教員の養成課程にもSELの科目が設定されています。非認知能力、目には見えないけれども大切なものを修得し、教員になったときに、それを教育できるような指導法も身に付けさせて現場に送るという状況があります。

スライド下の写真は、メルボルン大学教育学部との研究連携の様子です。

昨年度、豪州メルボルンでは、大学間連携としてメルボルン大学教育学部、ロイヤルメルボルン工科大学と連携しましたが、今年度、両大学から引き続き京都光華女子大学と協同研究を進めていきたいという話がありました。

なぜ、両大学とつながることができるのかということにつきまして私なりの捉えを紹介させていただきます。

私が所属している京都光華学園は、幼稚園から小学校、中学校、高等学校、そして大学、短期大学部、大学院が同じ場所に

ある総合学園です。光華女子学園は、東本願寺の大谷智子裏方（昭和天皇妃——香淳皇后——の妹君）が「仏教精神、特に親鸞聖人が明らかにされた浄土真宗の教えに基づく女子教育を京都の地で」と発願され設立された学園です。学園では、生き方の探求ということを大切にしていますから、個人の幸せだけではなく、社会全体が幸せになることが自分の幸せにつながっていく、というものの見方・考え方が教育方針に反映されています。

このような心を重視した教育が、日本の特徴的な日本人らしさにどうつながっているのか。それをメルボルン大学も、ロイヤルメルボルン工科大学も、着目していると捉えています。

このスライドは、OECDによる「Learning Compass」ですけれども、ウェルビーイングな社会に向けて、どのようなことが重要なのかということが示されています。これを見ても、知識、スキル、価値、態度というキーワードがありません。

この図が示すものは、やはり知識とかスキルだけではないけれど、価値、態度だけでも実現できないと捉えることができます。実現に向けて見通しを持って行動する、振り返るというサイクルが非常に重要であると考えています。

高橋先生からも提起ございましたけれども、どのように実現していくのかということ、これが非常に重要なことだと思っ

ています。つまり認知能力と非認知能力、これをスパイラルな形で「実現するために必要なことは何か」というように、「問いを見い出す」ことで深い思考力・判断力・表現力が磨かれま

す。さらに重要なことは、振り返り、リフレクションです。具体例を挙げさせていただきます。私が所属する学部からは小学校の教諭、幼稚園の教諭、そして保育士を輩出しています。具体的な例を挙げないと、なるほどという実感につながることが多くあります。例えば、算数で割合の学習をしています、なかなか割合が理解できない子がいて、理解できない、分からないことにイライラしている、という場面を想像してみてください。

イライラしながらも投げ出さないと努力し、一生懸命頑張っているうちに学習内容が理解できて、自分の力で問題を解くことができたときに子どもは非常に喜びます。そのとき教師は、できたことを共感して共に喜び合うことが重要です。さらに、重要なことがあります。その「さらに重要なこととは何か」ということを学生に考えさせます。そうすると、ディスカッションの中で出てくるのは、「なぜ、できたのか」ということを問いつける」という考えです。できたという事実とともに、なぜ、できたのかということの評価するプロセス評価が非認知能力を育成することにつながるのです。

つまり、「諦めなくて良かった」とか、「粘り強く頑張った良かった」とか、「友達が教えてくれたから分かるようになった」とか。それは、人との関係性の中や目に見えない非認知能力の重要性を言語化して価値化することです。最終的には自立をしなければならぬので、その自立につながる価値感覚というものを認識して、実感して、なるほど、というところまで落とすことが重要であると考えています。

冒頭、「見えにくいことを見えやすく」「分かりにくいことを分かりやすく」ということをお伝えしました。例えば、「思考力、判断力、表現力等の育成」ということが重要なキーワードとして度々取り上げられることがありますが、これも分かっているようで分かっていることが多々あります。

学生に「思考力って何」という問いを投げ掛けます。そうすると、「考えること」というように返ってきます。でも、「それで十分なのか」というように再度、問いを掛け、次のような場面を提示します。「考えてますか」と声を掛けると、「考えてます」と答えます。これは確かに考えてるわけです。「何を基に考えているか」ということを教育の中で、その大切さを感じさせる必要があります。つまり、「関係性を基に考えているか」ということです。それは算数、数学、物理、科学、英語、国語、社会、何でも共通すると思います。「関係性を基に考える」ということを意識化させることが重要です。

次に判断力ですけれども。「判断力とはどのような力なのか」という問いに対して、文字通り「判断する力」という反応。そのとおりです。しかし、さらに深く考えてみると、「より良い判断」というものが世の中で求められているということに気づきます。そこで、「より良い判断をするためには、何が必要か」という問いを掛けます。学生は戸惑う瞬間もありますが、ディスカッションの中で建設的に見出してくることは何かというと、「より良い判断をするためには知識が必要である。そして情報が必要である。これまでの経験が必要である。」ということとを語るようになります。つまり、判断することが大切ということは、誰しもが感じるわけですけども、そのためには何が必要かということを見える形にしないと、必要なことが身に付かないということでした。

また、表現力の育成については、重要な視点は、「表現したいというそもそものエネルギーはどこにあるか」ということです。自分の中に説明したいことがあるか、あるいは自分の中に書きたいことがある、自分の中に話したいことがあるか、ということが重要です。それが無い状態でいくら教師が子どもたちに「書きなさい」と言っても、書きたい、という意欲にはつながりません。「書きたいことがあるけれども、うまく表現ができない」という意識があることで表現の工夫の必然性が生まれるということです。

私たちは、まずウェルビーイングというものがどういう概念なのかということを知ると、知るという段階を重要視しなければいけないと思います。そして、知ることから気づきを持ち、気づいたことを基に問いを立てる。問いを立てることで、深く考え、自分の中に落とし込む。この過程と結果において、自分ごととしての実感が生まれることが行動化につながる、ということを実感することが重要であると考えています。

主体的、対話的で深い学びということも同じことで、主体的ということ「別の言葉で説明してごらん」と投げかけると、「自分から」とか、「自ら進んで」といった言葉に変換されません。「主体的になるためには、主体的な学びを実現するためには何が必要なか」というように、自問自答し、他者と意見交流をすることで汎用的なものの方・考え方が磨かれると考えます。極めて重要なことは、「解決すべき必然性のある問いや課題意識を持っているか」ということです。そのことが、主体的な学びの実現に、大きく関わるのです。

積極的に学ぶということは、真面目な子であれば、先生に言われたことを一生懸命やろうとしますから、これは積極的な姿が生まれると思います。しかし、本当の意味で主体的な学びというのは自分の中に解決したいという問いや課題意識がないと実現しないと考えます。

対話についても、全国の様々な学校で実践されていますけれ

ども、やはり対話をすることでどのような良いことがあるのか、その価値を問うことが重要です。自分には無かった視点、あるいは自分では考えられなかったことに気づくことで、自らのものの見方・考え方が拡充していくことを実感する。そういった日々の積み上げが、社会にとって重要な力を生んでいくのではないかと考えています。

ウェルビーイングな社会を実現するためには、社会が抱える課題や問題を自分ごととしてとらえ、問い続け、考え続け、共に語り合うことが重要です。

最後に、私が所属している光華女子学園が大切にしていることを改めてお話しさせていただきます。光華女子学園では、光華の頭文字を取って、「こ〓向上心、う〓潤いの心、か〓感謝の心」ということを大切にしています。このような心は、どこでどのように育まれるか、ということにつきまして。「薫習」という言葉があります。家庭の中で耳にする言葉とか、あるいは周りにいる人たちの振る舞いとか、それがあたかも香りが身に染み込んでくるように伝わっていく。そういったところが、日本の文化的な良さにつながっているのではないかと感じています。ちょうど時間となりましたので、以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。